

はじめに

本書は経済学を初めて本格的に学ぼうとする学生の皆さんや、経済学「再入門」を志す社会人の皆さんを対象として執筆されたマイクロ経済学のテキストです。すでに市場には世界的ベストセラーの翻訳書を含む数多くのマイクロ経済学のテキストが流通しています。しかし、いくつかの既存のテキストはページ数が膨大で、自学用としては優れていても現在多くの大学で一般的となっている2学期制(セメスター制)/4学期制(クォーター制)の講義では使いづらいとの印象をもちます。また、あるタイプの既存のテキストは「入門」とうたっていても実際に要求される数学の知識・技能が高校数学のそれを大きく逸脱していて、初学者が経済学の有用性を実感する前に継続して学ぶ意欲を喪失してしまうように思います。その一方、別のタイプのそれは数式をまったく使わないことをセールス・ポイントとすることで内容が希薄になり、初学者は「わかったつもり」にはなっても、中級以上の学びにつなげることができません。

このような筆者の「消費者」としての経験をふまえ、本書は既存のテキストと差別化された次のような特徴を有しています。

- ①1単位もしくは2単位相当の授業科目のテキストとして内容が完結するように、マイクロ経済学の一般的包括的内容をカバーしつつ扱うトピックが厳選されていること。
- ②中級以上の学びにつながる数式・グラフによる論理展開と、初学者にとって「腹落ち感」のある直観的説明の両立が図られていること。そのために、数式・グラフによる論理展開においては高校数学との連続性に配慮がなされるとともに、側注に話し言葉による丁寧な解説が付されていること。
- ③初学者が社会科学全般に通用する強力な分析ツールとしてのマイクロ経済学の有用性を実感できるように、余剰分析とそれを応用した政策評価に最短距離で到達できる内容構成であること。
- ④アクティブ・ラーニングを実現するべく、随所に演習問題が用意されていること。

上記のようなねらいから、本書は議論を部分均衡分析の枠内にとどめ、消費者の効用関数については一貫して準線形性を仮定しています。その最たる理由は、これからマイクロ経済学を本格的に学ぼうとする方にとって、社会科学全般に通用する強力な分析ツールとしてのマイクロ経済学の有用性は、余剰分析にこそ見出せるのではないかとの筆者の考えによるものです。言い換えると、本書はマイクロ経済学の初学者にとっては最もハードルが高い(?)無差別曲線の概念を用いることなく、初学者が一気に中級以上の学びに到達できるように内容構成が工夫されています。もちろん、経済学の学びを深めるうえで無差別曲線の

概念を理解することは必須ですから、それについては本書全体を通読するうえでは省略可能な発展的内容として内容構成に含めることにしました。

本書を大学の講義のテキストとして使用する場合、2単位の授業科目であれば本書のすべて(序～第14講)をカバーできるものと思います。1単位の授業科目であれば、例えば次のような授業計画が想定されます。

○入門クラス(市場機構の機能と限界)

第1講+第2講+第4講+第5講+第7講+第8講もしくは第9講+第10講
もしくは第11講

○発展クラス(市場競争の経済的意義)

第1講+第2講+第3講+第4講+第5講+第6講+第7講+第12講+第13講+
第14講

なお、各講・各節のタイトルに付された「★」は、本書のレベルからみて発展的な内容であることを示します。この部分を省略しても、本書全体の理解には影響しません。また、本書の執筆にあたっては既存のテキストを中心に数多くの文献を参照しました。テキストという本書の性格上、それらの出所を学术论文のように逐一掲示することはしていませんが、代わりに主要な参考文献を各部毎に「文献案内」としてまとめました。これらを読み比べることで、ミクロ経済学の学びがさらに深まるはずですが、ぜひ参考になさってください。

経済学は「社会科学の女王」とも称されるエキサイティングな学問です。その洗練された方法論から、今日の人文・社会諸科学の深化と統合においても核心的な役割を果たしています。また、今日のような成熟した市民社会において、経済学的な見方・考え方は自律した個人として生きるすべての人々が身に付けるべき必須の教養といえます。しかしながら、世間一般が抱く経済学のイメージと実際のそれとのあいだには、大きな隔たりがあるように思えます。昨今、巷にはさまざまな経済論議が溢れ、あたかも「一億総エコノミスト」とも言える状況です。そのため、専門的な知的トレーニングを積まなくても、自らの「生活者」としての実感や経営者としての経験のみに基づいて経済(学)を語るができると思う人もいます。その一方で、経済学は「象牙の塔」に籠った学者が難解な数式を弄ぶだけの知的遊戯に過ぎず、現実の社会が抱えるさまざまな問題を解決する手段としては無力であると考えてる人もいます。それどころか、反グローバリズムや市場原理主義批判といった文脈においては、ときに経済学が人々の憎悪の対象になることさえあります。こうした見解の多くは経済学に対する人々の誤解から生じたものであり、経済学を少しでも本格的に学んだ者にとっては容易に同意できるものではないでしょう。本書が経済学を初めて本格的に学ぼうとする学生の皆さんや、経済学「再入門」を志す社会人の皆さんのニーズに合致し、このような経済学に対する誤解を解く一助となれば、筆者にとって望外の喜びです。

本書は筆者がこれまで早稲田大学と岡山大学で担当した学部1・2年生を主な対象とする授業科目の講義ノートと、講義後に履修者の皆さんと交わした対話がベースとなっています。筆者の拙い講義にお付き合いいただき、積極的に質問を寄せていただいた学生の皆さん、どうもありがとうございました。また、本書の出版にあたっては、法律文化社編集部 梶谷修氏にたいへんお世話になりました。梶谷氏の辛抱強い励ましと細やかなご配慮により、何とか原稿をまとめることができました。

筆者が初めて大学の教壇に立ったのは、東日本大震災の起きた2011年の春でした。新年度の授業開始が5月の大型連休明けに延期されるなか、授業初日の朝に緊張しながら教場の大教室に向かったことが、まるで昨日のことに思い出されます。気がつけば、それから10年以上の月日が流れました。「光陰矢の如し」とはまさにこのことです。学生時代から今日に至るまで、母校の指導教員であった森映雄先生、藪下史郎先生をはじめ、多くの先生方から温かいご指導を賜りました。先生方の学恩に深く感謝いたします。

2022年5月

大熊 正哲